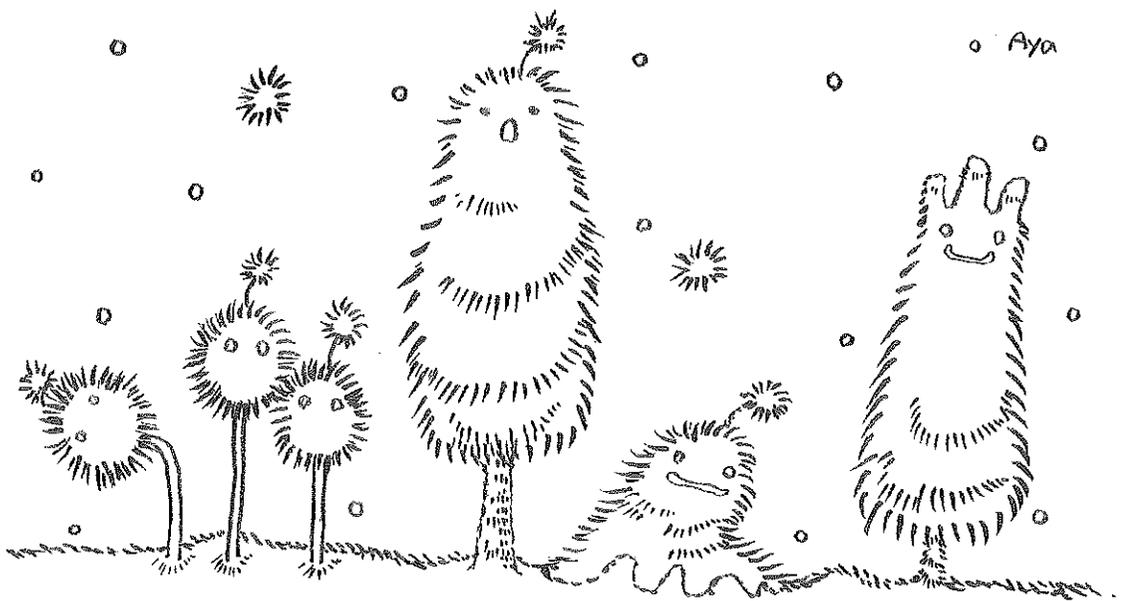




全国の対話と物議の土壌をかもすニュースをお届けします

かもす通信

働く女性の全国センター(ACW2)



表紙:うらまつ

特集

議論沸騰！働き方改革のゆくえ

【特集】議論沸騰！働き方改革のゆくえ P2

東京訪問記 表あるいは裏？P11

【連載】相談員奮闘記/お知らせ P12

かもすワークショップを広げるために P14

ウィメンズ報告/セカンドハーベスト始めました！/速報 P15

カンパのお願い/編集後記/4コマ P18



議論沸騰！働き方改革のゆくえ

「週3日労働で生きさせろ」というテーマについて、さらに深く掘り下げようとしたのが今回の特集です。自分たちがまずこの「週3日労働」で何を感じるか、そこから何を要求したいか、また自分たち以外の人がこのフレーズを聞いたらどう思うか、などなどを取り上げ、さらにこの要求を練り上げていきたいと考えています。

「首相官邸：働き方改革実現会議 2016.9.27」より

1. 同一労働同一賃金など非正規雇用の処遇改善。
2. 賃金引き上げと労働生産性の向上。
3. 時間外労働の上限規制の在り方など長時間労働の是正。
4. 雇用吸収力の高い産業への転職・再就職支援、人材育成、格差を固定化させない教育の問題。
5. テレワーク、副業・兼業などの柔軟な働き方。
6. 働き方に中立的な社会保障制度・税制など女性・若者が活躍しやすい環境整備。
7. 高齢者の就業促進。
8. 病気の治療、そして子育て・介護と仕事の両立。
9. 外国人材の受入れの問題。

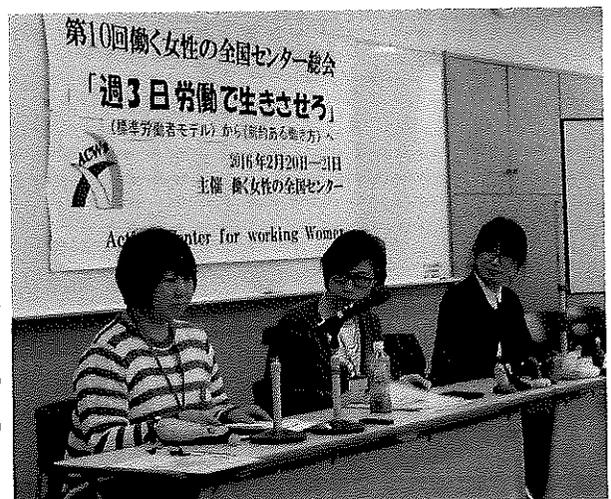
運営委員による チャット座談会 2016年12月3日

出席者：ナガノ ハル(司会)、伊藤みどり、栗田隆子、小園弥生、鈴木ちあき

ナガノ(30代)： みなさん、ACW2 ではこの一年のテーマを「週3日労働で生きさせろ」として活動してきましたが、いかがでしたか？

栗田(40代)： からだのことを考えると、週三日で仕事をするというのはありがたいとやはり思います。でも、実際働きたくても働けない人がいるということもまた現実。私自身は、事務の仕事に今度就くのですが、事務だと週三日というのは少なくて、職種によってかなり違う事態なのも痛感しました。

ちあき(60代)： うーんと・・・60歳までは週5日労働の意識だった。実際は、60歳まで週4日の

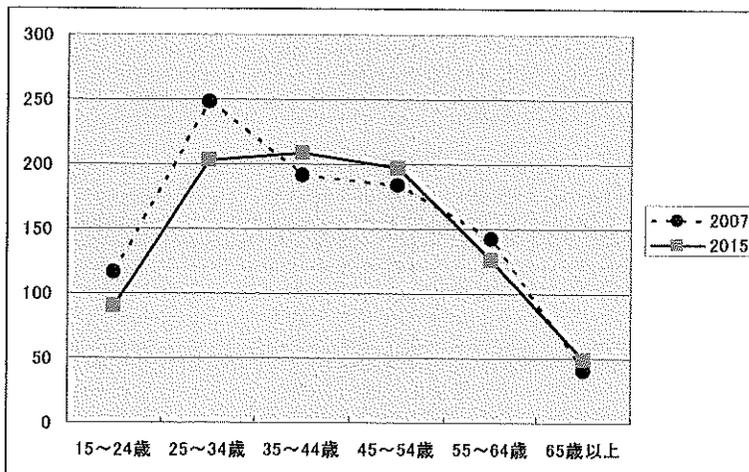


非常勤で、あと1日はフリーの仕事をしていた。60歳からはほぼ週4日になったが、65が見えてくると週4日は精神的・体力的にきつと感じるようになった。60過ぎたら週3日賃労働がいいな一と感覚的に思う。社会全体で週3日労働がベースでいいというのは、今の若い世代の体調はそうなんだと理解して、その声を受けとめている感じです。

小園(50代)：週3日労働が現実が増えてるとホットラインでも感じてます。

伊藤(60代)：安倍内閣の働き方改革の提言があって、タイムリーな内容でした。

ナガノ(司会)：前回の「かもす通信」で載せた総務省統計局の分析データで、働き盛りの25歳～34歳までの女性がこの十年間で50万人ほど、フルタイム労働から週3日程度の労働になっているという事実が衝撃的でした。私たちが主張する「週3日労働で生きさせろ!」は現実的ではないという批判も多くありましたが、実際、現実となっていることについてはどう思いますか？



週40～48時間労働者数(万人)と年齢の比較
(2007年・2015年)

伊藤：週3日労働は、若者の体力の問題ではなく、今の労働現場の問題としてとらえる必要があると私は思います。政府も、週3日労働を推奨し、兼業、副業、起業、業務委託を増やそうとしています。それが、どんな問題なのか、考えていく必要があると思います。

小園：“安定した仕事があると思うな。労働者は自分で自己開発をして渡り歩いていくのがこれからの働き方”というような提言がこの夏、たてづけに経団連とか、厚労省

とかから出されましたよね。(注1)

そこには労働法はもう時代遅れだ、みたいなことすら書かれていて。

伊藤：安定した仕事がないという事は、労働時間を1時間単位でなく、45分、30分、20分単位などとして、6時間シフト交代で休憩なしなど、とことん、遊ばせず、休むことなく、必要なことだけさせて、切り捨てる仕事が増えているんだよね

栗田：特にサービス業とか、介護の仕事などで顕著なわけですよね？この辺りのことなど、職種が違っていると、週3日労働がピンとこない・・・という層もいるので、ていねいに論を進めていきたいと思ってます。

小園：9月の拡大運営委員会では、現在や、これまでのその人の働き方によって、見ている風景が違うというギャップがあった。すでに、家事労働も含めて週5日以上にすぐ長時間労働の人もいたし、週3日も働けないしという人もいて、自分がどこの位置にいるのか浮き彫りになったというか、価値観を問われました。それで、又エックや、ウイメンズプラザでいろんな人に参加してもら

特集：議論沸騰！働き方改革のゆくえ

って、重ねて議論して、「週3日労働で生きさせろ!」は身のまわりでも共感してくれる人が増えて、こなれてきたと感じています。週3日を選びたいとか、選べないけどすでに週3日であるとか。それでも生活できなければと考えると、最低賃金2000円でも安い! という話になってきた。

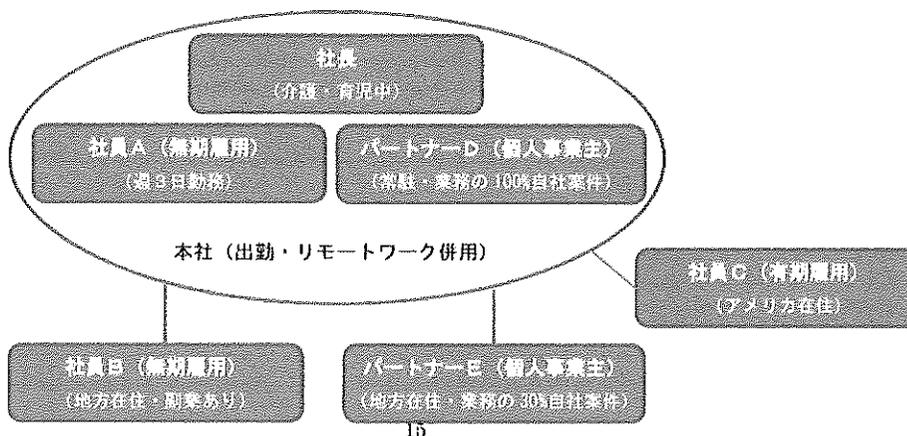
ちあき：週3日労働は現実って言い切っているのかなと思う。ACW2のホットラインの中では、短時間労働や週30時間未満の人からの相談が増えているので、そこから物申す必要はあると思うけれど。

小園：しごとで若年女性の支援をしているけど、働きづらさに悩んできて、週3日くらい働くのがちょうどいいという人が多いです。週5日働くというのは、もはや勝ち組の人か、心身がかなり強い人にしかポストがない、夢物語のような気がします。

栗田：時給で働く場合、稼ぎが減ってしまうという問題がある。だけど、「週3日労働で生きさせろ!」のテーマは、「生きていく」ことが目標で、週3日では時給を高くとか、生活保障がしっかりしているといったことを合わせて主張する必要がありますね。

<図表9> 多様な人材を活用する会社の人員構成例

勤務場所や勤務方法、就業日数、副業の有無など多種多様な人材が活躍する。



「新産業革命による労働市場のパラダイムシフトへの対応～「肉体労働(マッスル)」
「知的労働(ブレイン)」から「価値労働(バリュー)」へ～」経済同友会より
図表では「社員A(無期雇用)(週3日勤務)」などの短時間労働が想定されている。

ナガノ(司会):「週3日労働」なんて、甘えてるのでは? といわれることに関してはどう思いますか? もともと ACW2 では「はたらく」を賃労働だけではない、自分や人のケアも含むと長期ビジョンでも言っているところですが。

小園：過密な週5日労働、赤ん坊を育てながら、とか介護をかかえてとか、どうなんだろう。つらくないですか?

栗田：かつて、学校に行かない子供は「甘えている」と言われていた時代がありました。しかし時代が変わることはこの歳まで生きていても、結構ある。

伊藤 : 甘えているっていうかもう、今の現代社会、産業革命から 200 年、無駄な仕事が多すぎる。何でもかんでもモデルチェンジするとか、パソコンで言えば、必要のない機能をつけるとか。人間の暮らしが振り回されている気がして、これ以上成長神話をベースにした働き方をやめる、そういう境目の時代に私たちは生きている。会社以外で働くことを想像できない。産業革命から、働くことは、会社員がスタンダードだとすりこまれてきた。甘えてるというのは現在の社会構造に洗脳されているのかな。会社で働くために生きてるのか、生きてるために働いているのか。この間の電通で叫んで自死した若い女性社員がいて、私たちも考えていく必要がある。

栗田 : どこに私たちが立つかという問題でもあるでしょう。甘えていると言われる人の立場について考えることを、私はどちらかといえば重視したいところがある。甘えているという人に対して、説明するのは大事かもしれないけれど、無理に説得して理解させようというより、まず、甘えていると言われる人のそばに立ちたいです、私は。

小園 : スピードがちがう。今は事務職では 1 人が昔の 2 倍は働いていると思います。昔、私が社会に出た 30 年前は、先輩の背中を見ながら、時にはいろいろと教えてもらいながら、ゆっくり育てられた。

伊藤 : 70 年代 よく思い出せば、相当きつかったこともある。労働力集約型で職業病が大量発生していた経験もあるから。この時代もチャップリンのモダンタイムスと比較されていた。

ちあき : 仕事の面白さって賃労働の面白さとはなんだろうということを立ち止まって考えたい。仕事のやりがいとか手応えとか、それって何かなって考えると、自分である程度裁量があるとか、そういう仕事でなければ、職場で自分が人として敬意を持ってお互いを遇していく・「私はモノか」と怒っていた人がいたけれど、人としていられるとか、能力というもので判断されて、その能力というものが、物差しが単一というか、そうじゃなくて、いろいろな面から自分を見てもらえたり人を見たりとか。職場の職務権限の違いはあっても、人としてはお互い大事にするとか、そういうことがとても大事なのではと思う。それが今週三日にどう繋がるか・・・は今言えないけれど。

小園 : 2倍3倍のスピードになって、人が幸せになっているのか。仕事が入るのにたっているのかとか考える時間も失って、追われるばかり。仕事が自分の手の中にない。夜中のワンオペとか、夜中のテレビショッピングを生でやってコールセンターで受けていて、それで働く人が病気になっているとか聞くと、働くって人を壊すためにあるのかな。安全じゃない。娘も夜中の飲食で働いているんだけど、週 6 日も働いて保険も年金も引かれているけど、浪費もすごくて、そんな生活はなんとかしたいと本人も思っているみたいだし、親としてももうやめてほしい。

[注 1] 新産業革命による労働市場のパラダイムシフトへの対応 -「肉体労働(マッスル)」「知的労働(ブレイン)」から「価値労働(バリュー)」へ-(経済同友会)、「働き方の未来2035:一人ひとりが輝くために」懇談会審議会資料/厚生労働省、など。

※この座談会はスカイプ会議で声を聞きながら、チャット入力で行いました。字数限定のため、とくにオチはありませんが、その分運営委員のリアルな声が反映されているかなと思います。

これを読んでくれたあなたのコメント歓迎です。メール(office@acw2.org)でお寄せください。(編)



週3日の賃労働で 誰もが生きられる社会を

この一年の活動を経て、現在、働く女性の全国センターでは提言をまとめて記者会見することを考えています。

この文章は、私たち働く女性の全国センターが、なぜ週3日の賃労働を求めていきたいのかを書いたものです。まだまだ暫定的なもので、皆様からのご意見を必要としているものでもあります。またそれは働くことだけではなく、社会保障など、私たちの生存権と絡めて週3日の賃労働で、誰もが生きられる社会について模索しているのです。ぜひ、この提言についてのご意見をおよせください。



「扶養されているから」「彼女たちが選んだから」という言い訳で日本型の細切れ雇用(兼業・副業を含む)の現状を覆い隠してはならない。

私たちは要求する。

私たちは「家族間の扶養」があろうとなかろうと、短時間労働であろうとも、なお安心して生きていけるようになりたい。

最低賃金は、例外なく、生活保護費より高く生存権保障をすることとする。

生活保護を切り下げて「障がい者」や「高齢者」の雇用促進している現在、最低賃金の例外規定は時代遅れであり撤廃すべきである。障がい者作業所での賃金ではそれこそ自立生活など、不可能なのである。私たちはどのような立場であれ、まず生きていくことを前提とした「働く」を求めている。

厚生労働省は、女性が自ら望んでいる「自発的」非正規就労と「非自発的」非正規雇用就労とを分けてとらえている。だが生存権の保障に自発的選択か否かという個人の属性を持ち出すのは本末転倒である。非正規就労を自発的に選んでいようとまいと等しく「生存権」は保障されなくてはならない。

一億総活躍社会 女性の活躍推進に入らない女たちの「働く」から私たちは出発する。

今の女性の活躍推進法は、従業員301人以上の企業に雇用されている女性にしか適用されない。

しかも、正社員優遇である。

あたかも管理職を増やし、育児休業取得率を増やすなどという。

そして、パートで働く場合は、パートのまま柔軟な働き方で「活躍」できるなど非正規の問題があたかも解決されるかのような幻想を与えている。しかし、それがまさに幻想であることによって、多くの働

く女性たちにとっては、無関係な法律となっている。

幻想とはどういうことか？

まず、いわゆる週35時間未満の女性短時間雇用者人口は、2007年1119万人から2015年には1273万人へ154万人増加した。

現状として、週3日か4日以下しか働いていない「細切れ雇用」(兼業・副業を含む)が増大しているのである。

しかも、雇用保険・社会保険適用外の週20時間未満の労働者が増えているのだ。

総務省の統計からも、私たちの働く女性のホットラインの相談の実態からも、細切れ雇用(兼業・副業を含む)という、いわば企業側としては、「必要な時間に必要の人を無駄なく確保して使い勝手が良く」、働く側にとっては、「一つの職場では、一人では生存できない」雇用が、女性が望む、望まないにかかわらず増大しているのである。

家族がいるかどうか、副業しているかどうかなど、個人の属性によって一定の雇用形態を結果的に押し付けていく政策にも、反対である。

さて、上記のような、雇用の実態を続ける企業が増えている中で、私たちは「週3日で生きられる社会」を模索せざるを得ない。

企業のグローバル化の流れの中で、週休3日制度や1日6時間制度が現実化され始めている。そのこと自体は必然だと思し、否定はしない。ただし、それと同時に第3次産業革命と言われる時代において、一人の想定外も生み出さずに生身の人間に対する生存権保障される社会が作られなければ、ますます、社会の不安は広がる一方なのである。

私たちの望む働き方とは、政府の働き方改革とは、違うという事が、この出発点の認識の違いからして明らかであろう。そもそも、「政労使の話し合い」の中に女性労働当事者の声が入っていないという点でも、すでに私たちの声は素通りしているのである。

今後要求を整理する予定だが、暫定的に以下の要求を掲げることとする。

1. 最低賃金、誰でもどこでも、時給 2000 円以上に引き上げ。

2. 「細切れ雇用」の撤廃

時間単位の働き方が、15分、20分、30分、45分など労働時間の単位が短縮化している。最低賃金が1時間単位であるので時間単位の下限は「1時間」とするべきである。

3. 手待ち時間や待機時間そして昼休みを削らない

4. 残業の禁止で、週3日労働を標準労働にする。

かつて、19世紀のイギリスの産業革命以来から女工哀史などに代表されるような長時間労働が横行し、私たちはそれに対し戦ってきた。過去の歴史を振り返っても週6日が、週5日労働になってきた。

そして、いつでもどこでも店が開いているなどという、いわゆる「便利な社会」の中で、健康や生活を犠牲にしている労働者がいることに想いを馳せる必要がある。

5. 税について基礎控除を180万円に引き上げる。

6. 社会保障について1時間単位で所得に応じて保障される。

7. 契約期間は、1年以上とする。

わたし
と
週3日労働

週3日労働よりも当たり前の日常を

ワーキング・ウィメンズ・ヴォイス
成瀬 穂美(なるせ えみ)

近頃、時間短縮、効率化ばかりが正しい労働のありかたのように論じられ、時間を使うのが悪い風潮が漂っている。

私は、自治体の男女共同参画関連施設で企画の仕事をしている。企画の仕事というのは、情報の多さ、人脈の太さ、経験の深さなど時間がかかったり、維持するのが面倒だったりするものに裏打ちされている仕事である。一見すると「非効率的」なものが仕事の厚さを左右する。

果たして、このような仕事を週3日に時間短縮したり、効率化したりするとどうなるのだろうか？



現在、私は週 27.5 時間で働いている。非常勤特別職とか、333公務員(地方公務員法第3条第3項第3号に該当するという意味)とか、嘱託職員とか呼ばれている。一般的に考える一日の労働時間が8時間だとすると、 $27.5 \text{ 時間} \div 8 = \text{週3日プラス}\alpha$ の勤務時間で働いていることになる。しかし、実態は、一般職の公務員より一日の労働時間が少し短いだけで週に5日勤務している。

週の労働時間が3分の2ならば、単純に業務量も3分の2…ということにはならない。当然ながら、毎日の出勤の中で、毎日発生する雑務にも追われるし、「業務 2.5」(見えない微粒子「PM2.5」になぞって、業務分担としては明記されていないけれど確実に存在する業務をこう呼んでいる)にも悩まされる。

週5日分の労働をしているのと同じなのに、週3日分しか給料は出さないとになったら(いや、そうなっているのだが)、仕事へのモチベーションは下がる。時間短縮や効率化が進んでいけば、一部の事務処理は週3日労働で可能になるかもしれない。しかし、仕事の種類によって、私の仕事のようにまったく違う結末に向かっていく危険を感じている。

私たちは、仕事を通して成長していくことが多い。仕事だから身に着くスキル・知識。仕事だからつながる人脈。仕事だから感じる緊張感。そんな人生の貴重な経験を週3日労働の枠に押し込められて達成できないと思う。実際に、週に 27.5 時間という中途半端な勤務では捨ててきた機会も多い。

仕事の機会を失うことは、将来の自分の伸びしろになる部分を制限し、ひいては自由を失うことにもつながると考えている。

週3日労働を懸念する理由は他にもある。たとえば、社会全体が週3日労働であればいい。しかし、そうはならず、これまでと同じフルタイムで働く人たちが主流派のままならば、週3日労働の働き手はいつまでたっても労働の周辺に追いやられたままになる。そういうマイノリティに家事労働や育児・介護など無償労働は負わされることになるのはこれまでの私たちの経験の中からも容易に想像できる。

それに、シフトによって週3日勤務になると、顔を合わせることがない同僚が出てくることになる。理念を分かちあったり、課題を共有したりするのが、職場の仲間だと思う。そういうつながりがなくなったら連帯は崩壊する。

当然ながら、労働組合も弱体化する。週3日労働と耳触りのいいことを言いながら、実は労働者の分裂を企てているのかと疑わしく思えてくる。

毎日、職場に行く。そして、職場のみんなと仕事をする。そして、定時になったら帰る。夕方、家族は家に帰って、それぞれが家のことを分担する。家庭の都合や自分自身の体調が優れないときは、きちんと年休をとって休む。そんな当たり前の日常が流れていけば、週3日労働なんて発想はそもそも生まれてこなかったはずだ。

私は、そんな当たり前の日常が流れるように仕事がしたい。

わたし
と
週3日労働

「週3日で生きさせろ！」は ACW2のスローガンとして適切か？

木下

ACW2の会誌で「週3日で生きさせろ！」のタイトルを見た時、びっくりしました。両宮さんの「生きさせろ！」に感動した私は、悪質なパロディのようにも感じられました。私のような非正規は、週5日で食えなくて、残業したり、多重就労したりしているのに、なぜ3日なのでしょう。まずは事業所に「週5日で生きさせろ！」を求めるのが先ではないですか？「標準労働者モデル」から「制約ある働き方」へ、というのは分かるけれど、それがなぜ「週3日」に集約されるのかどうしても納得できませんでした。

今回「週3日労働」というテーマで原稿を書かないかと打診があった時、書けないと断りました。しかし、肯定的な意見ではなく、率直な意見で構わないというので、書くことにしました。前提として、ACW2で「週3日で生きさせろ！」ということを取り上げた以上、「週3日労働」だけに絞った意見を書くのは適切ではないので、「週3日で生きさせろ！」というスローガンだと解釈します。

スローガンは簡潔で分かりやすいのがよく、説明しないと分からないのは良くないです。それ以上に悪いのは誤解を招くものと、説明されても分からないものです。「週3日で生きさせろ！」は国に言っているのか、事業所に言っているのか分からないし、要求している水準も不明確です。

私は事業所に求めることと国に求めることは区別しないとイケないと考えています。労働の対価は事業所に、福祉は国に求めるという考えです。



エキタスのスローガンである「最低賃金 1500 円」は、国に最低賃金を 1500 円にすること、事業所に時給 1500 円以上で雇うことを要求しています。フルタイムで時給 1500 円ならば、年収は約 300 万で結婚できる最低ラインぐらいで、持続可能な最低生活賃金ラインになります。ちなみにフルタイムで週 3 日労働すると約半分で、医療費を除いた一人暮らしの生活保護に近くなります。明瞭で、包括的な良いスローガンです。これを見て、時給 1500 円なら自分は〇〇できると考えて、エキタスの旗のもとに集まることができます。でも、「週 3 日」では、それなら自分は〇〇できるというイメージが出ないし、そういう働き方を望む人は限定的です。「週 3 日で生きさせろ！」が共感より誤解や反感を生むなら、理解を求めるより、いったん下した方がいいと思っています。そんなことより、「とりまユナイト」で団結した方がいい。ACW2 として、最賃 1500 円、「制約がある働き方」を望む人はそれにプラス福祉をと国に要求すればよく、週 3 日と限定する必然性はありません。

私をもっと違うことで、ACW2 の独自色を出してほしいのです。例えば、今年話題になった高畑裕太の強姦事件ですが、これは客によるセクハラで労働問題です。雇用者は性被害の恐れがあるのにワンオペ体制で働かせていたし、事件が報道された時も、従業員を守ろうとしていません。そしてマスコミによって彼女は徹底的に「個の侵害」(パワハラの 6 類型の一つ)を受けました。ホテルで働いていた労働者なのに性暴力にあった上に、全国的にここまで書き立てられるのは理不尽です。ホテルでは女性従業員が性被害にあうことがよくあるけれど、ほとんどが泣き寝入りか示談で済まされているそうです。「事業所は、職場での性被害から従業員を守れ!」「マスコミは被害者の個の侵害をするな!」と運動することもできたでしょう。

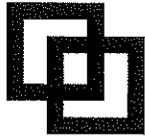
また、大阪で高速道路の料金所で、年配の女性を狙って下半身を露出していた男が公然わいせつの疑いで逮捕された事件がありました。2011 年ごろからやっていたそうですし、防犯カメラにも映っているのに、なぜこうも逮捕まで時間がかかっているのでしょうか？ 料金不払いならすぐに捕まっていたはずです。客だからですか？ 実害がないと考えたからですか？ 被害者が年配女性だからですか？ これも事業所によって職場のセクハラが軽く扱われた事例です。

ACW2 は職場のハラスメント対策や法律の不備、性差別のために、不快な思いをしたり、仕事を失ったりしている大勢の女性たちの力になってほしいです。戦後、男性正社員中心の労働組合が必要悪として受け入れてきた、女性非正規への不当な取り扱いを糾弾する組織であって欲しいのです。高畑事件のような職場の性暴力事件の際には、職場のハラスメント対策の不備と、加害者有利の法体制の問題点、被害者の人権侵害を非難する声明を出してほしいし、明らかにセクハラ定義の要件を満たすのに、具体的事例を前に事業所にセクハラだということもできず、税金と人材を掛けながら、ブラック企業ほど何もできず、情報収集機関に成り下がっている均等室に、労働者を守るように権限を与えてほしいというロビイングをお願いしたいのです。

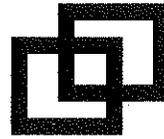
ACW2 がやることは、相談電話の中に入っているのではないですか？



早速、週3日労働で生きさせろ、に対する真摯なご意見をいただきました。私たちは、これらのいただいたご意見から学び、あるいは互いに誤解のある点があれば、対話を通して解いていく過程で、信頼関係を構築し、より良い主張ができるようになって信じてやみません。ご寄稿くださった成瀬さん、木下さん、ありがとうございます。



東京訪問記 表あるいは裏？ 栗田隆子



私は12月11日、12日に一橋大学で行われた「国際シンポジウム 移住・家事労働者の権利保障とILO189号条約 アジア、ヨーロッパ、アメリカ、そして日本」12月13日は、ANA コンチネンタルホテル東京で開催された。主催の「EU ハイレベル会合 女性の経済的エンパワーメント」に参加した。この二つを同時に紹介したいのは、まさにこの二つが表裏（どちらが表かは置いておくとして）の関係のように思えたからだ。何せ、ハイレベル会合でパネリストとして登壇した女性経営者が「自分は女性を会社に引き止めるのに失敗した。ナニー（乳母）がいれば女性は会社にとどまると思い、米国商工会議所に、日本がナニー受け入れを許可するように働きかけた」と発言したということもあり・・・。



一橋大学の案内板

国家戦略特区とは、いろいろな規制を撤廃して経済成長を目指す区域だが全国に誕生している。その特区法が昨年成立したのだが、賭けてもいいけど、ナニーを持ってきて、女性の能力を活用させて経済成長させるなんて、無理だと思う。

例えば先ほどのその女性経営者のスーパーウーマンぶりこそが、周囲についていけないと思わせ、女性たちが辞める理由になっている可能性だってあるではないか。

あと下手すれば自覚のないところで、パワーハラスメントをしてしまっている可能性がある。パワハラは自分に自覚がなくやってしまう時があるのだし。



EUハイレベル会合の様子

それは、「教育」（って言葉あまり好きじゃないのだけど、学びというか・・・）が深く関わっているのではないかな、と思う。その学びの結果として海外の家事労働者たちの引きつけられる発言があったと思う。労働教育の一環として、もっと、「労働」とは何かということを深める「社会的な対話」を行っていきたい。

そもそも高齢化と少子化で労働力が減りながらなお成長するために女性を活用し、能力主義で労働力の減少を補おうとすることが誤ってるのではないか。根本的な企業社会というか資本主義というものの、末路を感じる。

他方で、資本主義の末路とは別のありようの「労働者教育」の存在について触れたい。一橋大学での発表では、必ず労働者教育について語られた。また、海外で働く移住家事労働者と、国内の労働者を、家事労働者と、その他の労働者を、様々なものを「結ぶ」役割として、C189条約や、労組の存在が語られていたが、

なんだか、電話を切りたくない気持ちが伝わってくる。

「じゃ、明日からどうすればいいの？」そんな相談者さんの声が聞こえてくるようだ。重たい荷物をもう一度抱える気分になれず、持ちたくないという思いがあふれ出す。私もなんだか、心もとない、踏ん切りのつかない相談内容について、相談者さんが満足しているのか、これからどうしようという不安と向き合うのが大変ではと心配になってくる。

今なら言えるのでは？と思い、初めて「Genuineness(真であること)」を使ってみた。

「Genuineness(真であること)」とはカール・ロジャースのカウンセリング理論のひとつでカウンセラーがカウンセラーという役割の仮面をかぶらず、一人の対等な人間として、時には向き合うというやり方だ。相談者さんと話していて、「もしかしたら、この後、すごく落ち込んだりしたらどうしよう」などという不安があるとすると、「Genuineness(真であること)」では、それを相談者さんに率直に伝える。

「あなたが、すごく落ち込んだりしていたらどうしようとは私は心配しています。」

もちろん、時と場合や言い方などに細心の注意を払う必要はある。失敗することもある。けれども、成功した場合の効果は絶大で、そこで初めて打ち解けあえる場合もある。

高山さんからは「やるのには勇気がいるし、こんなこと言っていんだらうかという不安もあるし、その勘は正しい。でも、一度やってしまうと相談者さんとの向き合い方が楽になるし、コツをつかめばできるようになるよ」と言われていた。いつか、やってみたいとひそかにワクワクしていたことだ。

自分の正直な気持ちをアイメッセージでたどたどしく伝えてみた。たどたどしすぎて、電話を切った後なんと伝えたかさっぱり覚えていなかった。ただ、「あなたが不安な気持ちを抱えていて、これからどうしようかと落ち込んでいることが心配で、この電話を切ったあとのことで気が重くなっていたら…。私もどうしたらいいかわからないけれど」と訴えていたように思う。

すると、相談者さんは、ちょっと笑って、「ははっ、そうなんですわ」とワントーン上がった声で答えた。その後、「とりあえず、あと一週間やってみる。きいてくれてありがとう。」と自分から電話を切っていった。相談してきた30分前は、「もうとにかく、今は。何も考えたくないくらい嫌だ」と言っていた。

本当にそれは摩訶不思議な魔法のような体験だった。

相談員が相談内容について教示するとやはりどこかで思い込みがあったのだろう。情けなくて、よいアイデアなんてなんにもないことを伝えるのはとても怖い。相談員という仮面を降りて、社会の波にも



まれてあたふたしている一員となるということ。

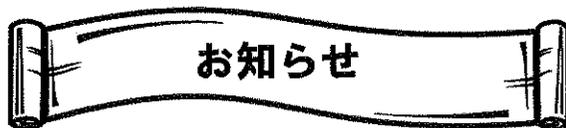
私は相談員という役割の仮面をかぶったりしたくないという思いがある。

自分が相談者だったとき、「この人は相談員だからこういうこと言ってるんだろうな」とどこかひねた気持ちで話を聞いていたりする。「心から心配しています」といわれても、「いや、それはあなたが相談員だからそういってるんでしょ?」と信用することができない。

私は電話相談員という立場を通じて、漠然とした「社会」というものに対する信頼を取り戻したいとおもっている。それは私が信じたいという気持ちがあり、生きる糧にしたいと望むからだ。社会を信頼するとは、電話口の向こうの人の力を信頼することからはじまることもある。

相談者さんはどんなに力なく見えても、私が思いもつかない選択肢や解決法を教えてくれる。日々の生活の中でその人の困りごとはその人が一番の専門家であるということにとっても納得している。私はその専門家の人の力を信じ、ほんの少し別の視点で一緒に物事を整理できればと思っている。

「Genuineness(真であること)」をはじめてやってみて、私の中からみるみるうれしい力が湧き出てくるのを感じた。私は嘘をつかなくていい。役割の仮面をかぶらなくていいというのはとても気持ちのよいことだと思った。



かもすワークショップ@東京 無事終了しました。

かもすワークショップ@東京の皆様、ご参加ありがとうございました。

全10回を通じて、延べ人数118人参加。充実したワークとなりました。

講座ではかもす実践編として、対話トピックスを30分自由に話してみるという試みも行われました。

毎回、グランドルールを確認し、アイスブレイク、ワークショップ……休憩を挟んで、実践編と盛りだくさんな内容。毎月一回の金曜日の夜、みなさん忙しい中、かけつけてくださり、夜ご飯におにぎりもぐもぐ、お菓子もぐもぐとしながらの開催でした。

来年は6月開催予定となります。

次回のかもすワークショップでは進行係も募集しております。かもすワークショップの進行係はプロフェッショナルではなくあくまでひとりの参加者として行っています。みんなで助け合いながら、安心・安全にできますので、ぜひ、お問い合わせください。

ぜひ次こそは参加したいと思われる、とりわけ関東近圏の皆様、今後ともよろしく願い申し上げます。

ママボノチームから提案 かもすワークショップを広げるために

小園弥生



12/7 日本財団ビルでの成果発表会

ことの発端は、夏の終わりにホームページ改善の悲願をもって、ナガノさんと伊藤さんと私の三人で渋谷のNPO法人サービスグラントのすてきなオフィスを訪ねたことだった。「今一番広げたい活動は何ですか？」などなど聞かれる。そのときはホットライン10年のまとめをやっていた時期で、熱く語っていたら、「でも、これ以上相談が寄せられても相談員は足りない、電話もかからないのでは？ だったら、活動の担い手を増やす方が先では？」「(ぎくっ)そ、そうかも」「かもすワークショップがせっかく軌道に乗り始めているなら、こっちに注力した方がよいのでは？」「はい、ではお願いします」ということになった。客観的に外からみてもらうのはスリリング。指摘はかなりの確。

「ママボノ」に登録した育児休業中の女性たちから、ACW2に手を上げてくれた7名(SE、商品開発・企画職、WEBプロデューサー、IT コンサルタント等)のチームによる「かもすワークショップ」検証活動が始まった。期間は10月末から12月初旬と短期間だったが、最終的に●発信情報の整理、●ワークショップの進行役育成、●アンケート内容の改善、という3つの改善提案をいただいた。なんと進行役募集チラシや、ワークショップ告知用のシンプルなウェブサイトひな形まで作ってくれた。矢部いづみさんはじめチームのみなさま、ありがとうございました！ そのうちに、ぜひワークショップにもいらしてください。

で、さっそく12月の今年最終かもすワーク@東京で進行役募集チラシを配り、尋ねてみたところ、6人も手を上げてくださった。すばらしい～。セカンドハーベストと言い、師走に入って今年のヒットが続く。少しはろうそくの明かりがとる、ACW2の年の瀬です。

そしてやはり「ホームページがこのままではねえ(よよよ)」という話にもなった。さらなるご縁を願います。(または読者・会員のみなさまでホームページに強い方がいらしたらご連絡ください。)



「働く女性の全国ホットライン」10年目のリアル

～だれもが週3日労働で生きられる社会に～

平成28年度 東京ウイメンズプラザフォーラム

参加企画 11月12日(土)18:00～20:30

報告:運営委員 鈴木ちあき

ACW2では夏のヌエック分科会に引き続き、東京ウイメンズプラザフォーラムでも「週3日労働で生きさせろ」をテーマにワークショップを企画しました。

私は週6日労働が「普通」だった時代に正規で就職し、育児を始めて自活できなくなりましたが、収入が自分の自立の基盤になると信じて、その後も「週5日は労働日」と思って非正規で働いてきました。でも、体力的にも気力的にも今までのようにはいかないなど感じるようになり、週3日労働が今年度の短期ビジョンとなった時は《自分にとって望ましい生活は？と考えなおす時の象徴的なタイトル》だという理解でした。けれど意見交換を重ねるたびに若い世代からは《象徴ではない。現実だ！》と異論が噴出し、感覚的にも理解できるかは未知数ながら、懸命に理解しようと努めているところです。

当日プログラム冒頭で紹介されたホットライン相談の背景や総務省の労働統計男女比較でも、「週3日労働が女性の現実」を補強しています。その後、上の私見を導入にしてワークショップに移りました。話し合いのルール(「対話の土壌をかもすワークブック」より)確認は丁寧にやり、アイスブレイクで場をほぐして開始です。5人のグループ2つで盛会とは言えませんが、部屋の広さからはほどよい人数で、「自分の今の感覚」発、暮らし、時間、体調、労働現場、男性の認識、政策、法、セーフティーネットなど多角的な切り口で、率直な意見交換の場になったと思います。対話の土壌、また一つ醸(かも)せました。以下、アンケートから紹介します。

(1)ホットライン10年目のリアル

- ・すでに週3日で働いている人が多いというのが、しかし、その人たちは豊かに暮らせているのか、気になりました。(会員、30代)
- ・私のパートタイムで働いてきた経験とものすごく共通する相談ばかりでした！！(ある意味驚きでした。日本全国的な問題ですねーそして世界の現状でも共通の低所得労働の現状)。改善して“人”が幸せになる社会を創りたいです。(会員)
- ・今働くのは大変だと思った。(会員)
- ・データで10年の変化がよく分かった。(非会員、50代、非正規)
- ・日頃思っていて職場の誰にも話せないことを話せて、ストレス発散させていただきました。(非会員)

(2)ワークショップ「週3日労働になっているという現実から考えること」

- ・週3日で、週3日以下で、貧困でなく「豊かに」生きられる社会で生きていきたいと強く思いました。(会員、30代)
- ・とくに若い方の現状は、今後さらに悪くなってゆくのではときぐしています。私も様々な現状やデータを調べているのですが、時間もお給料も所得も、数値が下がっている現実を改善すべく活動中。データを書き留めながら勉強している所です。経済団体、女性団体 etc 連ケイして人間を助けたいですね—————！！(会員)
- ・新しい仕事の評価の仕方を皆で考えていきたい。(会員)

セカンドハーベスト ACW2で始めました

セカンドハーベストとは日本初のフードバンクです。お困りの方に無料で食べ物を配布しています。

Q1 食糧を受け取れる対象の人は？

A 関東周辺にお住まいで食糧が不足し、困っている人ならだれでも。

Q2 もらうためにはどうしたらいいですか？

A メールで連絡の上、予約を取り、事務所に来所してください。

案内状を発行いたします。

Q3 どういう方法で受け取れますか？

A 浅草橋と国立にある事務所に身分証明書、案内状と大きな鞆を持って取りに行く(ピックアップ)か、自宅が遠い方や事務所に取りに行くのが難しい方は配送料を支払い、自宅に配送してもらう(パッケージ)のも可能です。

Q4 どのようなものをもらえますか？

A ピックアップは、野菜、果物、パン、レトルト食品、お米、ペットボトル飲料、調味料、菓子類、缶詰、シリアルなど、その時々企業の企業から寄付されたものを一塊、どんと渡されます。内容は基本的に選ばません。パッケージは、受け取れる側の生活環境、家族の人数、食品アレルギーの有無に応じて、詰め合わせを考慮し送ってもらえます。ただこちらは野菜、果物、パンなど生鮮食品は含まれていません。

Q5 受け取れる頻度は？

A 月に一回くらいで、年6回までです。

Q6 実際もらってみてどうですか？

A 個人の感想ですが、食糧がぎりぎりしか買えない状態(今でもですが)だったので、セカンドハーベストから食糧が届きはじめて、余分に食糧が家にあることだけでも精神的に楽になりました。時には缶詰と乾パンだらけだったことや、震災がおけると、そちらに優先的に食糧がいくので自分のもとには少ししかもらえないなどいろいろなことが起こりますが、それでも受け取れてよかったなと思います。迷っている人はぜひ一回お試しでも。今苦しいほかの方も少しでも楽になるといいなと思います。(な)



働けと言わない働く女性の全国センターからの明るい未来への提言

命を削られないで生きる。

2017.2.18(土)~19(日)

国立オリンピック記念青少年総合センター

●18日 センター棟 513号 ●19日 カルチャー棟 和室1 ●宿泊は先着30人 詳細はホームページで順次お知らせします。

2016年度のテーマである「週3日労働で生きさせろ!」を受け、私たちが生きるには具体的にどんなことが必要なのか? ACW2では「はたらくとは命をささえることだ」という100年ビジョンを掲げています。そこから一緒に「はたらく」を「生きる」を「命」を考えてみませんか?

2月18日(土) 開場13:00 開演13:30~17:00

(1)トークセッション

ゲスト 飯島裕子さん(岩波新書『ルポ貧困女子』著者)

聞き手 栗田隆子(働く女性の全国センター代表)

(2)リレートーク

(3)分科会(夕食後)

・私たちの訴えを表現しよう。バナー・プラカード作成し、写真や動画にしてみませんか。

「命を削られないで生きる/週3日労働で生きさせろ」などのバナーを布で作成します。お手持ちのはぎれや着ない洋服などなどお持ちよりください。

・独身女性・子供なし・パートナーなしのメンバーで集まって話してみませんか。

夜に、例えばお母さん同士で話す会、LGBTで集まるなどなど、会合を他にも作りたい方、受け付けてますので、お申し出ください。

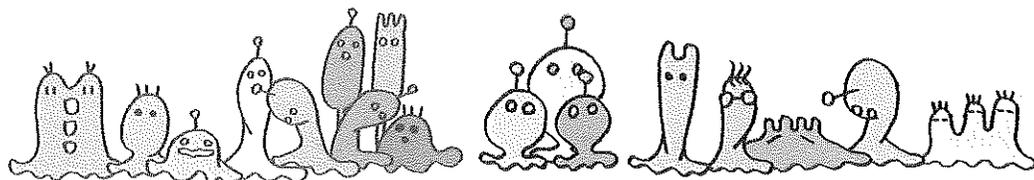
2月19日(日) 午前・午後

(1)午前 映画「イロイロ」鑑賞会 (シンガポールの家事労働者の物語)

(2)午後 働く女性の全国センター 総会

事務所カンパよろしくお願ひします。

働く女性の全国センター 一同



カンパ合計

¥77,350

2016年9月～11月分

3ヶ月間の収支 収入¥355,740 支出¥611,804

働く女性の全国センターは12月末で会計の締めとなります。

世知辛い世の中ですが、皆様の支えで活動できましたこと、深く感謝申し上げます。

今後、相談員トレーニングや小さなワークショップの会場とすべく、事務所を少し拡大いたします。事務所を拡大すると年間12万の家賃増額となりますが、共有スペースの拡大など、皆様がさらに集うことの出来るACW2となるようにしていきたい所存です。ACW2を暖かく支えてくださればこれほど嬉しいことはありません。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

そして皆様、よいお年をお迎えくださいませ。

○ 余った年賀はがき、書き損じハガキの寄付も歓迎です。

カンパ振込先

一口1000円、何口でも。

郵便振替 00130-1-669637
働く女性の全国センター

銀行振込 三井住友銀行 渋谷支店 普通 8658522
働く女性の全国センター 伊藤 みどり
ハタラクジョセイノゼンコクセンター イトウ ミドリ

編集後記

◆はじめて かもす通信の表紙を描かせていただきました。冬なので、ぼやっとくんたちにも毛が生えたら面白いかもと思い、ふさふさにしました。いろいろなものをかもす粘菌ですから、きっと可能性は無限大ですね。(うらまつ)

◆「大晦日定めなき世の定めかな」という井原西鶴の俳句ではないですが、働き過ぎに気をつけつつも、年の瀬の定めギリギリまで活動してしまっている働く女性の全国センターです。

私事になりますがどうやら10年近くぶりに派遣労働者として賃労働的な意味で働くことになりました。「働く女性の全国センター」に居ながら、働かない期間もある人生だったのですが、どうにもこうにもやはり働くことに舞い戻ってしまう…。そもそもお金がないということもあるけれど、私にとってはちょこちょこ働いたりするところに、何かあるのだろうと思うのです。でもそれは自己実現とかいうのではなく、とはいえ命を繋ぐと言っても、ケア労働のような真っ当に命を繋ぐ働き方でもなく、なんだかそこも中途半端なあたりで蠢き、右往左往しているのですが。

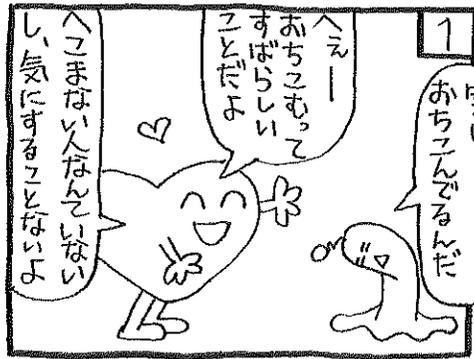
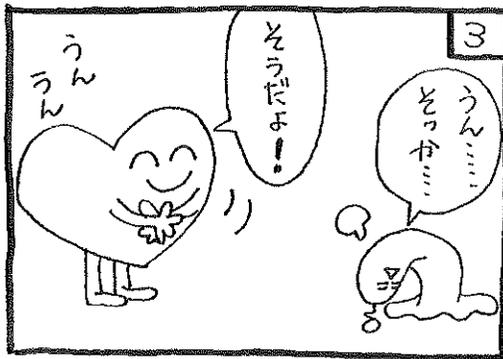
少なくとも私にとって働くとは努力や勤勉と簡単にイコールになりそうにない。こうなったらただただと働くことが、「働き方改革」やら何やらに対して抗うことにもなるなとおもったりもしております。働き方改革って、どこまでも尽くす対象は「企業」なんですもの。私はエゴイストと思われてもいいので(すでに思われてる?)、自分の命を削らないで生きていきたいものです。

ちなみにこれまた私事ですが、来年はもっと文章を書こうかなと思ってます。もちろんこちらのかもす通信にも色々書いていければと思いつつ。ともあれ、命を支える働くとはなんだろうと考える年の瀬。みなさま、何卒良いお年をお迎えください。自分と他人の命を大切にしながら。(栗田)

◆かもす通信、冬号。無事お届けできてなによりです。私は微妙にやる気がなく……一年の疲れがでてきているようです。いや、いつも、疲れ・だるく・体調の波の激しい私ではありますが……。最近「寝たきり」にならなくなってきたかも?とか。なっても、2,3日で回復するというか。いや、しかし、私も栗田さんとEUハイレベル会合にいったのですが、それから3日寝込んでしまいました。人の熱気に当てられたというか。お布団の中で、あのテンションで生きることは私には絶対に無理だと確信しました。私はただただ生きたい派なのですが、そうじゃなく、がんばりたいのだ! だらだらするのもプレッシャーだという方々のことなども考えたりしながら、自分とはまったく違う価値観の人との対話を来年はしていきたいな—と思っています。

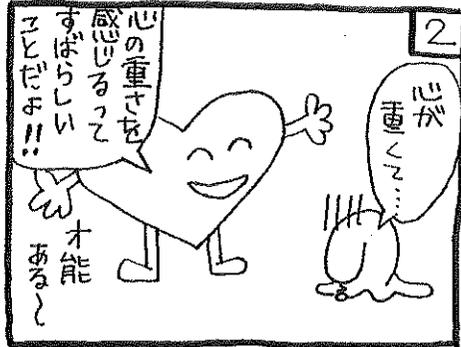
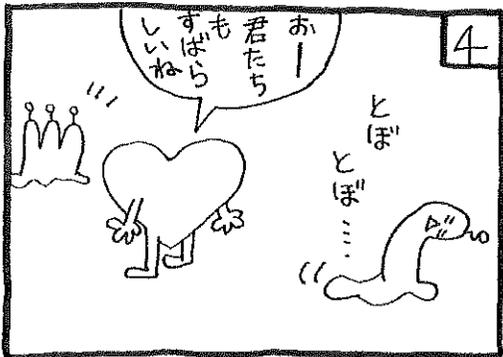
さて、ホットライン納めの12月10日。無事、今年目標である「月一回はホットラインにでる」を達成できました。その日は出てみようと考えている方のホットライン説明会も開催され、私は恥ずかしながら「先輩?」として、いろいろと話させてもらったりしました。なんだか、そうやって話せるのがとてもうれしい気持ち。毎月通ったホットラインの相談が自分の血となり肉となっているような。一年前の私と比べての変化を、その日感じる事ができました。いろんな方の話をきいたな—と帰り道に思い返しました。ホットラインの相談員は訓練を受けてはいますが、カウンセラーではないという伊藤さんの言葉も身にしみてきます。

今回、うらまつさんに表紙をお願いしました。他の方が書いたぼやっつとを見て、作者として、とっても幸せです。本当にどうもありがとうございます。改めて、ぼやっつとは何者かといいますと、「対話がかもされている場所に発生する粘菌妖怪」です。目には見えぬけれども、みなさまのおそばにいつもいます。(ナガノ)



ほめる

ナガノハル



ジャッジメンタル（審判的態度）には「否定」だけではなく、「ほめる」も入ります。相手をほめるというのは、こちらは相手のためを思って、むしろ元気づけるためにやっていることがほとんどです。けれど、それが相手にとっては「話を聞いてもらえてない・・・私の気持ちをわかってくれない」となったりもしたりします。そういう気持ちを伝えたいときはアイメッセージで「私はおちこむってすばらしいことだと思うけど、あなたは思う？」などと言い換えると、対話の種になります。

働く女性の全国ホットライン 0120-787-956

5. 10. 15. 20. 25. 30日 平日 18:00~21:00/土日祝日 14:00~17:00

会員のあなたもぜひご利用ください。毎月5日はセクハラ集中相談日

【住所】〒110-0015 東京都台東区東上野1-20-6 丸幸ビル3階

【TEL】03-6803-0796 【FAX】03-6803-0726 【e-mail】office@acw2.org

【HP】http://wwt.acw2.org/ 【Twitter】https://twitter.com/acw2org

【正会員（性自認女性）年会費】1口2,000円（何口でも可）1口1,000円（生活困窮者）

【通信/サポート会員（男性歓迎）】1口2,000円（何口でも可）

【郵便振込】00130-1-669637

【銀行口座】三井住友銀行 渋谷支店 普通 8658522

2016年3月発行 31号

編集・発行 働く女性の全国センター(ACW2)

ホームページ、ツイッター、会員メーリングリストで毎日情報配信中

感想・おたよりなど待っています。「かもす通信」係までお寄せください。

2016年12月発行 34号 編集・発行 働く女性の全国センター